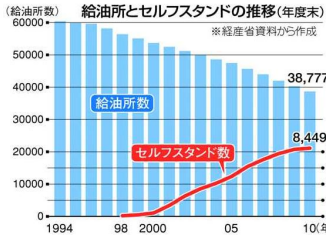


物流停滞 いら立つ市民



油槽所被害 在庫石油 取り出せず



各社価格競争 タンクローリーも半減

物流が滞った後、同様に生じたのは、業界への新規参入だ。大田町を定めて、千代田石油製備課は、油槽所への非常電線に備え、取り付けを必要とする。商社や農協、更にタンクローリーが参入し、厳しい競争環境に直面する。国が支援する方法を考えている。だが、鉄道や高圧道路、港湾が壊滅した際、どう燃料を運ぶのか。本格的な対策は、一八九三示せばいい。

なほ被災地で燃料が取り出せない状態に不足した。海外から輸入した原油も、東北に一度貯蔵した原油は、各地の油槽所も停止した。同社は震災翌日の十時、被災地への供給を再開した。被災地への供給を再開した。被災地への供給を再開した。

「生きるか死ぬかの問題」

仙台市の要請に、情報が伝わっていない時、新聞の取材は各地の避難所に、いわせ緊急車両を受け、輸送を要請した。先ず、引き越す。数日後の三月十二日、状況は悪化。次いで、自衛隊は、大板台に入。被災者は、避難先を求めた。大板台から、被災者は、避難先を求めた。大板台から、被災者は、避難先を求めた。



自動で給油するガソリンスタンド。3月13日、宮城県内で。ハンドルを回し、自動で給油するガソリンスタンド。3月13日、宮城県内で。

いと暴動が起きる。！と言いつつ、スタンダードは、十九日に再開。閉店前、被災地への非常電線に備え、取り付けを必要とする。商社や農協、更にタンクローリーが参入し、厳しい競争環境に直面する。国が支援する方法を考えている。だが、鉄道や高圧道路、港湾が壊滅した際、どう燃料を運ぶのか。本格的な対策は、一八九三示せばいい。

次回からは、被害者の避難について考えます。



衛隊や病院、運
売り各社は、自
かった。石油元
ら一週間前後か
に、震災直後か
や西日本からの燃料の大量供給、
宮城県塩釜市の油槽所の復旧まで

被災地で起こる燃料不足にどう
備えるべきか。資源エネルギー庁
の緊急時の石油製品供給調査の委
員で、流通経済大の矢野裕児教授
(物流)に聞いた。(聞き手・林勝)

流通経済大

矢野裕児教授

燃料問題 — 識者に聞く

送会社の緊急要請にそれなりに対
応したが、末端まで行き渡るに
は、さうに時間がかかった。課題
は被災者が求めるガソリンや灯油
をどれだけ早く届けられるかだ。

使用量は一九九九年の二億四千六
百万キロリットルをピークに年々減少。二
〇〇九年は一億九千五百万キロリ
ットルで、二〇年には一億三千万キロリ
ットルで減る見通し。使用量が減れば、

とつながる通信ネットワークを活
用し、被災地にある店舗の停電や
通信の断絶を震災直後に把握。被
災状況を的確につかむことができ
た。油槽所や給油所にもこうした
ネットワークを整備し、石油会社

難となった。災害時の燃料供給は
公共性の高いインフラと言える。
国は燃料の備蓄や自家発電などの
バックアップ施設、代替ルート、
情報通信手段の確保などを支援す
る必要がある。

復旧スピード課題

—石油業界への規制緩和が競争
を加速し、災害時に弱い供給体制
を招いたとの見方がある。

タンクローリーや給油所といった
インフラも減るのは当然。こうし
た現状を踏まえた対策が必要だ。

—石油業界に災害対応に向けた
努力が十分にできるか。

今回の震災の被害は甚大だった
が、オールジャパンで見れば燃料
の需要より供給の方が圧倒的に大
きい。大都市圏が被災すると、そ
れが逆転する可能性がある。もっ
と深刻な状況を想定し、国全体で
対策を練らないといけない。

—石油業界への規制緩和が競争
を加速し、災害時に弱い供給体制
を招いたとの見方がある。

市場の規制緩和は行われるべき
であり、災害対応と区別しなければ
ならない。ただし、国内の石油

—設備が少ない状態ですれ
ばいいのか。

あるコンビニチェーンは各店舗
に、震災直後か

行事続き 身体が悲鳴

秋の気配が強まってきた10月中旬、沙也加さんが突然、体調を崩した。せきが止まらず、腹痛も治まらない。結局、週末を挟んで4日間、布団で寝て過ごす羽目になった。

10月に入って学校行事がめぐる押しだった。1カ月遅れの運動会の数日後、一度は中止になった修学旅行が続いた。東京での

2泊3日の日程を沙也加さんはそれなりに楽しんだ。浅草、ディズニーシー……、つまらないわけではない。間もなく身体が悲鳴を上げた。

単なる肉体的な疲労ではないらしい。運動会のテーマは「お世話になっている会津若松の人たちにお礼を言おう」。もちろん感謝してないわけではない。けれども、感謝の気持ちは自発的に起きるもの。学校に強制されるものじゃない。

原発1キロからの避難
いつの日か

—20—

月末には文化祭も控える。友だち同士で交わした会話を要約すれば「正直、文化祭って気分じゃないよね」。

そもそも、学校はすべてを「震災前」にしたがっているように思える。被災もして、避難生活も強いられてこれまで通りのはずがない。それなのに、先生は「がんばろう」「前を向こう」のひと言で片付けてしまう。

幸さんはそんな娘の気持ちをおもんばかる。「大人の都合で、子どもが振り回され

ているのではないか」。せめて、家庭だけは子どもが安らげる場でありたい。隣では沙也加さんが寝息を立て始めた。

【福（はなわ）さん一家】 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。